茨木市
学校と地域をつなぐ〝エプロン先生〟の取り組み

玉櫛地区福祉委員会

貴船（きふね） 鈴江氏

髙田 潤子氏

小学校の新一年生が入学後、集団生活に慣れるまでの一カ月間、学校やPTAと連携しながら水色のエプロンをつけて授業中の子どもたちを見守る「エプロン先生」。この取り組みは、当時、学校の空き教室が福祉委員会の活動拠点であったことや、昔遊び・見守り活動等を通じて、子どもたちとの関わりを大事にしてきた歩みをよく知る学校からの依頼で始まりました。活動は、授業中はもちろん、始業前から給食、下校まで一緒。遠足にも付き添います。できる人ができる時間帯に関われることも大きな特徴で、新たな協力者を増やしながら、今年4月で5年目を迎えます。

エプロン先生の活動を通じて、「子どもたちと声をかけあい、顔見知りになれた」「子どもたちを通じて、保護者とつながり、活動を見せることから福祉委員への理解が深まった」といった地域内での良い変化が生まれています。こうした関わりが、子ども・保護者・先生・地域住民の顔の見える関係づくりと活動の好循環をつくり出しています。

富田林市
自治会と一緒に生み出した高齢者等生活支援〝ほっとらいふ〟の取り組み

不動ヶ丘町地区福祉委員会
ほっとらいふ

播戸 嘉明氏

梅田 寛章氏

高齢化率44・9％、男性の福祉委員が多く、地縁血縁が少ないことを特徴とする不動ヶ丘町には、現在64人の地区福祉委員がおり、映画サロンやいきいきサロン、夕涼み会や餅つきなどの行事を行っています。

ほっとらいふは不動ヶ丘町自治会と地区福祉委員会の支援を受けた任意団体として昨年6月に設立。少子高齢化が進む町の課題についてのアンケート調査から見えた、買い物や通院を含む移動等の①日常生活の困りごと支援を中心に、買い物ツアーや朝市、認知症予防講習会等の②憩いの場の支援、そして携帯電話の使い方や年賀状作成講習等の③IT支援に、会員制という形をとって取り組んでいます。

依頼の大半を占める移送支援の実現にあたっては、行政とよく事前調整し、行政からモデル指定を受けるなど、連携がポイントとなりました。

「安心して穏やかに毎日が暮らせるようになった」「自分も地域の一員としての存在感が持てうれしい」との住民の声が表すように、困ったときに身近な仲間で助け合えることが、今改めて求められています。

岸和田市
ワークショップきしわだと大宮地区との交流会

大宮地区福祉委員会
（社福）いずみ野福祉会
岸和田市社会福祉協議会

平松 昭子氏

叶原 生人氏

地域に根差した福祉施設として、その公益性を発揮し、地域密着型の社会貢献活動に取り組みたい「ワークショップきしわだ」（障がい者福祉施設）と、日頃の小地域活動の中心である大宮地区福祉委員会との出会いを、社協がつないだことから、協働企画は誕生しました。

「施設を知ってもらい、地域を知ることからはじめよう」と、住民に向けた福祉教育の視点も大切に、地域の親子を対象としたおやつづくり教室が実現。施設の利用者が先生役となり、福祉委員がサポート役を担います。

当日は、福祉委員会の声かけにより、子育てサロンや近所の親子の参加があり、「接点がなかったのでこれからは近くに感じられる」「次回は高齢者も一緒に楽しめる企画に」との感想が寄せられました。世代を超えて住民同士が知り合い、施設利用者も一緒に地域の福祉を支える、ともにつくる新たな地域活動の場として大きな期待が寄せられています。

小ネットリーダー研修会

地区福祉委員会と多様な団体の連携

～参加者や担い手の広がりを目指して～

近年、これまで地域の福祉活動を担ってきた福祉委員や民生委員・児童委員、ボランティアの高齢化や担い手不足などが大きな課題となる中、地域では「10年先の担い手、体制が見通せない」といった声が多く聞かれます。府社協は2月13日に小地域ネットワーク活動リーダー研修会を開催（870人が参加）。学校や自治会、福祉施設などの多様な主体との協働実践から、参加者それぞれが10年先の地域の姿をイメージした活動のヒントを学ぶ機会となりました。

総括コメント

大阪府立大学　小野 達也氏

日常生活圏域における住民主体の小地域活動は、これからの地域福祉構築の要。地域には解決していかなければならない「必要なこと」がたくさんあり、高齢化が進む2025年に向けてさらに増えてくる。そんな中で、「やりたいこと（自発性）」・「できること（可能性）」を大切に、お互いがお互いを支え合うまちづくりを進めていくことで、地域福祉活動をより一層魅力的なものにしていきましょう。